



EMERGENCY WATCH

No. 99 Mar 2019



神戸こども初期急病センター

2019年2月
受診者数
2123人

疾患頻度

1. インフルエンザ	556人
2. 急性上気道炎	507人
3. 感染性腸炎	271人
4. 咽頭炎	152人
5. クループ	70人



- ・インフルエンザA型感染者数ですが12月480名、1月1311名、2月531名となっておりますが、B型は12月0名、1月5名、2月7名でほとんど流行を認めません。
- ・RSウイルス感染症ですが、7月に23名、8月40名でしたが、1月6名、2月4名と冬期の流行を全く認めておりません。
- ・水痘は12月35名、1月37名と流行していましたが、2月は9名まで減少しています。



寒い冬が終わり、そろそろ暖かい日が増えてきましたね。今回は春先から流行しやすい感染症の中で流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)について取り上げてみたいと思います。

Q1 流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)ってどんな病気？

流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)は片側あるいは両側の唾液腺を特徴とするウイルス感染症です。2~3週間(平均18日前後)の潜伏期の後、唾液腺の腫脹、圧痛、嚥下痛、発熱をきたします。通常48時間以内に症状はピークとなり、1~2週間で軽快するとされています。唾液腺は耳下腺、顎下腺、舌下腺があり、いずれの場所でも腫脹が見られることがあります。

Q2 流行性耳下腺炎と年齢

発症年齢は3~7歳が最も多く、流行性耳下腺炎に罹っていても、30~35%の人は何の症状にありません。低年齢ほど症状がない人の割合が高く、年長児ほど耳下腺の腫れが長く続き、症状も強く、合併症が起こる頻度も高くなるとされています。

Q3 出席停止期間は？

耳下腺、顎下腺または舌下腺の腫れが現れてから、5日間を経過して全身状態が良くなるまでです。体調が良くなるまでは、外出は避け、できるだけ家の中で過ごしてください。

Q4 流行性耳下腺炎の合併症は？

合併症として注意が必要なのは、無菌性髄膜炎、睾丸炎、卵巣炎、難聴、肺炎、心筋炎などです。一般的には症状は軽く、一過性であることがほとんどですが、稀に症状が強い人が存在します。流行性耳下腺炎にかかってから、耳が聞こえにくい、男児で睾丸が痛い、男女を問わず腹痛があるような時には、必ず医療機関を受診してください。

Q5 流行性耳下腺炎の治療

流行性耳下腺炎に対する有効な治療はありません。水分をこまめに摂り、必要に応じて解熱・鎮痛薬を使い、しっかり休んでください。

Q6 流行性耳下腺炎の予防

明らかな症状がない人でも気道粘液中にウイルスが存在しており、飛沫感染や接触感染します。うがい、手洗い、マスク着用(特に感染した後でも)を心がけてください。免疫がない人は、同居家族から97.4%、同一教室内で89.5%感染すると言われています。感染力が非常に強く、症状がはっきり出ないため、知らないうちにかかる危険があり、年長児ほど、思春期以降の年齢になるほど症状が強くなると言われています。まだワクチンを接種していない人、何らかの事情で接種できなかった人は、できるだけ接種するようにしてください。